頭書増補訓蒙圖彙巻之廿一

雑類

此部には諸天神仏聖賢佛菩薩諸祖師其外人物の部ふ漢ろ仮補ひろくを

二王金剛

○右を右弼金剛と云人の生善成ふ人を那羅延金剛ともいふ

○左を左輔金剛をいふ人の断悪をよろしびふ人密迹金剛ともいふ人佛法の守護神なをいふ門ろ安置を

右弼金剛

左輔金剛

○持國天王乾達婆
毗舍闍と号す〜踏侵へて東方を守護ゝ
る四天王乃第一なり
○増長天王鳩槃茶
薜荔多を号す〜踏侵へ南方を守護ゝ
る四天王の第二なり
○廣目天王龍及び富
單那と号す〜踏侵へ西方を守護ゝ
る四天王の第三なり
○毘沙門天王夜叉羅
刹と号す〜踏侵へ北方を守護ゝ
る四天王の第四なり
○駄天ハ佛法の守
護神なり魔王佛合
戦ゝて奪ひ返さんと追ひ
掛ゝるを禪家へ
ふ安直を
○鍾馗ハ唐の明皇夢
に見給ひ南の進士鍾馗
なる者天下の虚耗妖孽を
ことごとくに祓ふ故よ
って道士余一と其形を
畫て天下に伝ふと云

持國天王

毘沙門天王

新草駄天

新鍾馗

辨才天女

○衆生に智恵福をめぐらせ給ふなり琵琶を弾じたまふ相とうつくしき妙音天女ともいへり

福禄壽

○福神なり天竺星といへり化現多り頭かぐしてはゞ紐にて結ぶもそうの鶴を愛とす庶民

大黒天

○八万四千の眷属あり貧困と轉じて福者とかさんと祈言たまふ摩伽羅神ともいへり

蛭子

○伊弉諾尊の第三の御子日の神の御子西宮蛭子三郎殿といへり市の賣買を守り給ふ神なり

布袋

○支那の散聖にて弥勒菩薩の化身なりとかつて常に布の袋を負くわえ乞人より布袋和尚と名ぢけたり

壽老人

○福神の一人にて人壽と一つ二星の化現なりと白髮ふかく慣の形ゑびす

○伏羲氏唐土の帝王大聖人なり此人生れ始めて網罟を作り漁獵を民に教へ又畫八卦を発明せり

○神農氏は同帝王にて聖人なり民に五穀を作事を教へ又市をなし交易の利を施しまた帝草本を味はひ寒温平熱の性を察し人身の病を療する事を教へ

○倉頡は黄帝の代の人なり眼四あり鳥の足跡を見て文字を作る是文字の祖なり

○黄帝は軒轅氏なり蚩尤と戰ひ遂に滅亡し帝位に即き聖人也此時に初て曆算律呂宮室書契冠服等を定め舟と作る妃を命じ元妃を命じ

○孔子は唐土周の代の人堯舜の道を弘め五常と教へ文宣王と崇ふ儒宗の大聖人なり

○老子は周の代義室の史なり生まれながら白髮なり道德五千黄紙を著し自然の道を教へ道士の大祖神人なり其經を去らず

○許由は堯帝位を讓らんとのたまふと聞て其耳汚まりたりとて潁川の滝にて耳を洗ひ賢人なり

○維摩居士ともいひ
ゆゑに拂子を持方丈
の門ふ八方の師子座
とひざり三万の大衆を
入て法門をしめす
○山城の弥陀ハ比叡山
横川の峯阿弥陀佛
のあるを見しるかと
恵心僧都拝みひて
写しのひろめたり
○聖徳太子ハ人皇卅二代
用明天皇の皇子カリ
世代推古天皇の御宇
摂政まします日本佛法の
祖なり守屋とこの拝民
○出山の釋迦ハ如来
十七歳ゆへて出家し
三十歳の御時十二月八
日明星の出るを見聞
豁大悟とあり正覚
を成ぜり
○誕生佛ハ釋迦如来
卯月八日寅の刻に誕
生しまひし七歩あゆ
御手をあたかをしく
上下をゆびさして天
上天下唯我獨尊と
のたまひしとそ入滅を
二月十五日なり

○初祖達磨は梁の武帝に出でゝ印度より
渡りて魏の少林寺に入
り面壁九年の苦行を達
磨ともいへり葦乃達
磨ともいへり

○不動明王右の手に
利剣を持たゝ摂の縄
を持ちて衆生の悪
をいましめ給へり
後の姿は動ぜぬ
かたちなれども

○龍猛菩薩は南天竺
に出世給へること八百年
後なり真言宗第一の
祖なり大日経金剛頂経
蘇悉地経を弘め給へり

○善導大師は唐土長
安の人なり出現ありて
三十余年かも瞑眠せ
ず唐永徽二年三月十四
日遷化

○天台大師は陳隋二代
の国師唐土天台宗の開
祖十一月廿四日六十歳にて
入滅智者大師ともいへり

○六祖大師は唐土の達磨より第六祖諱を恵能此下より禪宗五家に分る大鑑禪師の号なり

○傳教大師は寂證なり日本天台の開祖なり延暦廿一年に入唐五十六歳六月四日入滅

○役行者は役小角なり大和の人葛城山に入て孔雀明王の法を修ひ後小母沢鉢に入唐し

○寒山は和国の人天台山に常に拾得と住て文殊乃化身なりとも

○拾得は豊干禪師乃道の子にして拾ひ得て寒山と共に居るとの説

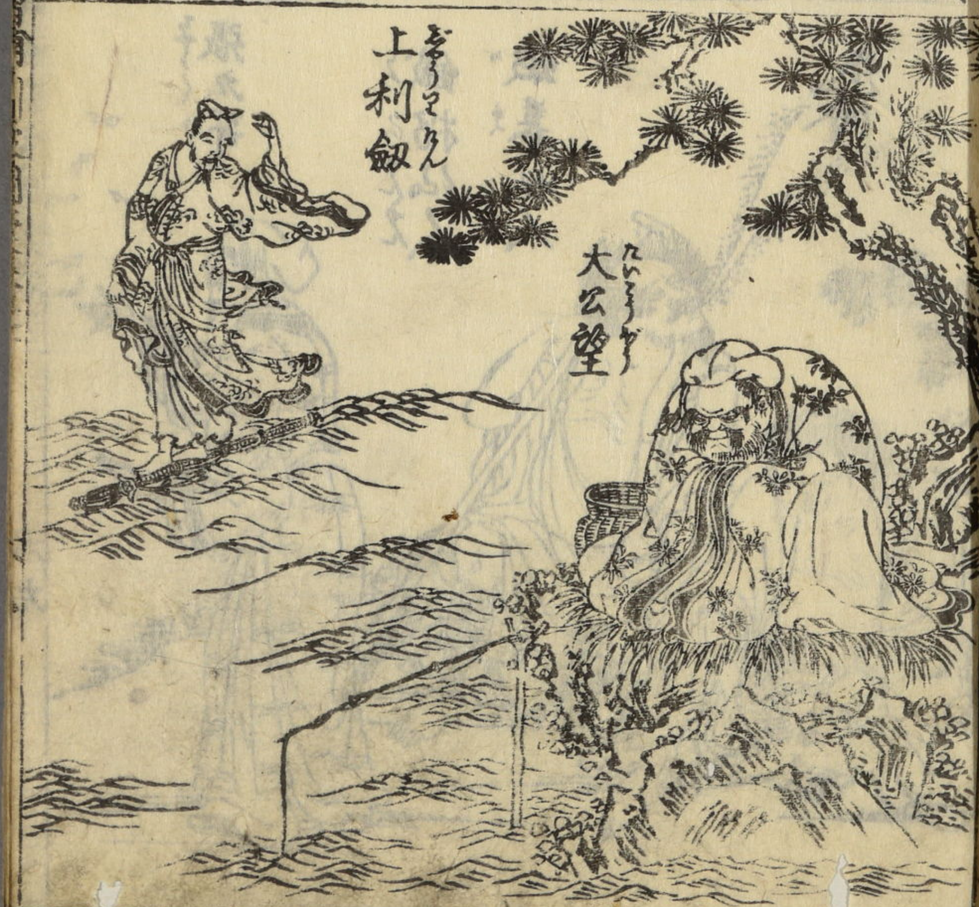
○巨霊人は大力神通を得る仙人なりと力の力あり常に白虎を

○費長房は後漢の代の人なり仙術を学びゆく白鶴にのぞ市中と飛行しめ玉ふる仙人なり

○琴高は神仙の術を学びて其功なり大い河の鯉に乗して水上に飛行し書を玉ふ仙人なりと

○大公望は尚父なり人と渭濱に釣して隙を待る法士なり後小八十余歳ふ及で周の文王その賢を玉ひ師とし玉ひ同武王に兵を数四ひつて紂王を伐し玉へり

○上利劔は劔を玉して大海の波上を飛行玉ふる術を学び玉へり



○張九哥は宋代の都ふ
居し名門にたぐひ稀の美
きをかの帝わかしそ
召て酒に酔たまひける日
ゆかりの人いるをとひ為き
紙と墨のうちに書く
もて数ぞ悉尼さりける
又招びくりそえの紙を
しるしかり

○鐵拐仙人は虚空に
むかふ〻己がのうちを
ふたのごとく御とゆさ
てし仙人なり

○蝦蟇仙人は○に
蝦蟇仙を飼ゆふ

張九哥

鐵拐仙人

蝦蟇仙人

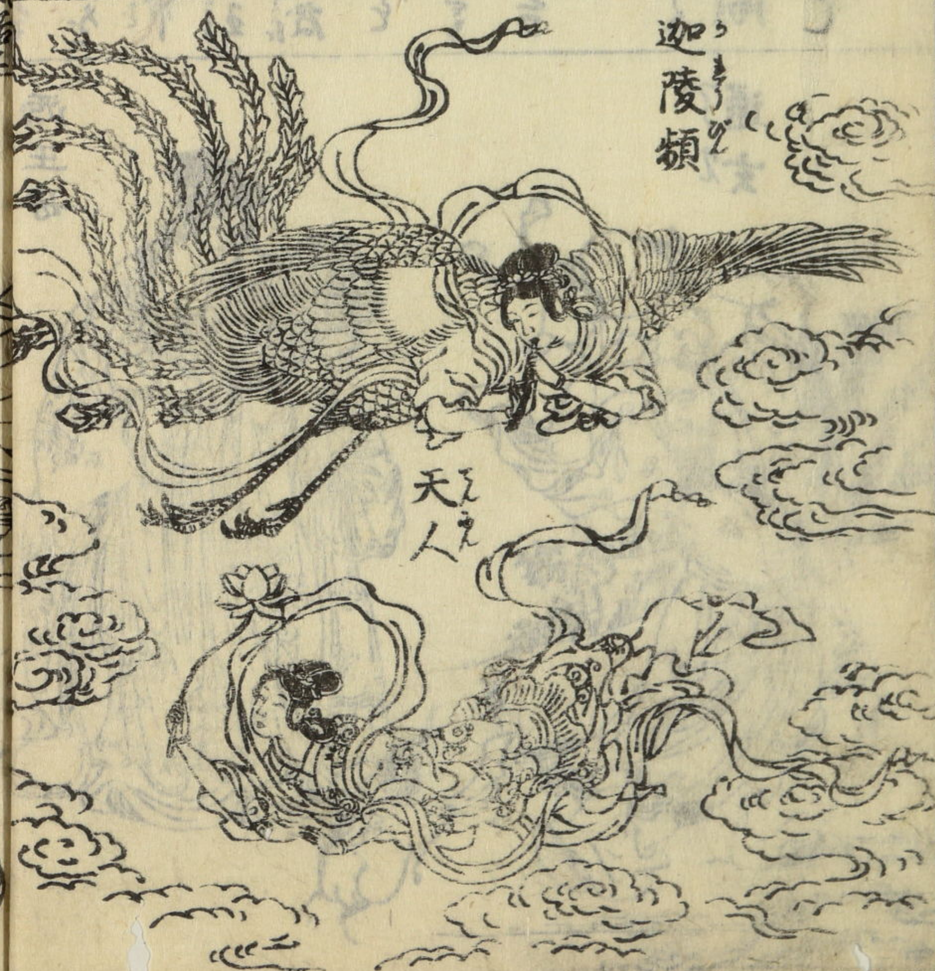
○西王母は仙女なり
前漢の武帝に桃を
奉る味甚美なり帝
核を植んと有しかは王
母の曰此桃三千年に一度
花咲実のる一つ食を
きはこれ〻の壽をも
つと東方朔は桃を三つ
ぬすみて食せりとぞ

○通玄は張果呂洞
賓と出と御仙なり
仙人なり

西王母

通玄

○天人の首の花曼
荼羅をとりて姫づるに
たらせどとも絶
ども命終るときい
楽をつくして五衰の
かかしるわり
○迦陵頻い天上の
鳥なり天人の面の
おくくしきをもて
美くしうるく妙
声鳥と好音鳥と
もいう是佛經の



○和歌い此國の風俗
をもて三十一字にかなをつら
ねて情を
述ぶる事実とりて
を故に佛神も感應
有りとの德あるいかなる
をも和歌い神代より
始りとして人倫天地
神鬼神の中神と崇め
給う夜通姫人麿赤
人とかの祖神とをも
うや撰び後成家家
衛のごとき人数多在
て秀歌多し

○詩ハ唐土ようかをもて故ふ唐くすの人文詩い和おいて日しくに義わり五言七言とて五字七字に作り絶句と律とありよく其情況述てんと感せしめ寄くるを事詩

ふの二つふたつわそり白居易あざ名ハ樂天晩唐の詩人なり蘇軾字ハ子瞻東坡と号ける家の代代人

筆道

晉の王羲之

小野道風

ゆり漢字ハ晉の王羲之筆法の祖とも石碑ハ書もまぶ墨石

すべりもこ入しとゆり日本にて八渡嵯天皇弘法大師橘逸成ハ三筆とゆ道風佐理行成と三跡とゆ伝も筆ハの名筆後世に残ってく其筆跡ハ

ちゃんぐり子園親王の筆ハ代代邸家一流と称ト

て今世ハ習ひ

○琴は伏羲の作り始めし五十絃又廿五絃あり琴とは樂器に用ゐる和琴とは又世に流づる十三絃の琴をいふくし琴とは書由ちくびとも多くあり

○香は清潔白の漆ある物ふく様とさん多故に非常仏に焼かるとその香遠きにつる仙経は水に入てもづしも

よろく沉香とは書ち

○韓信屠女婦天人

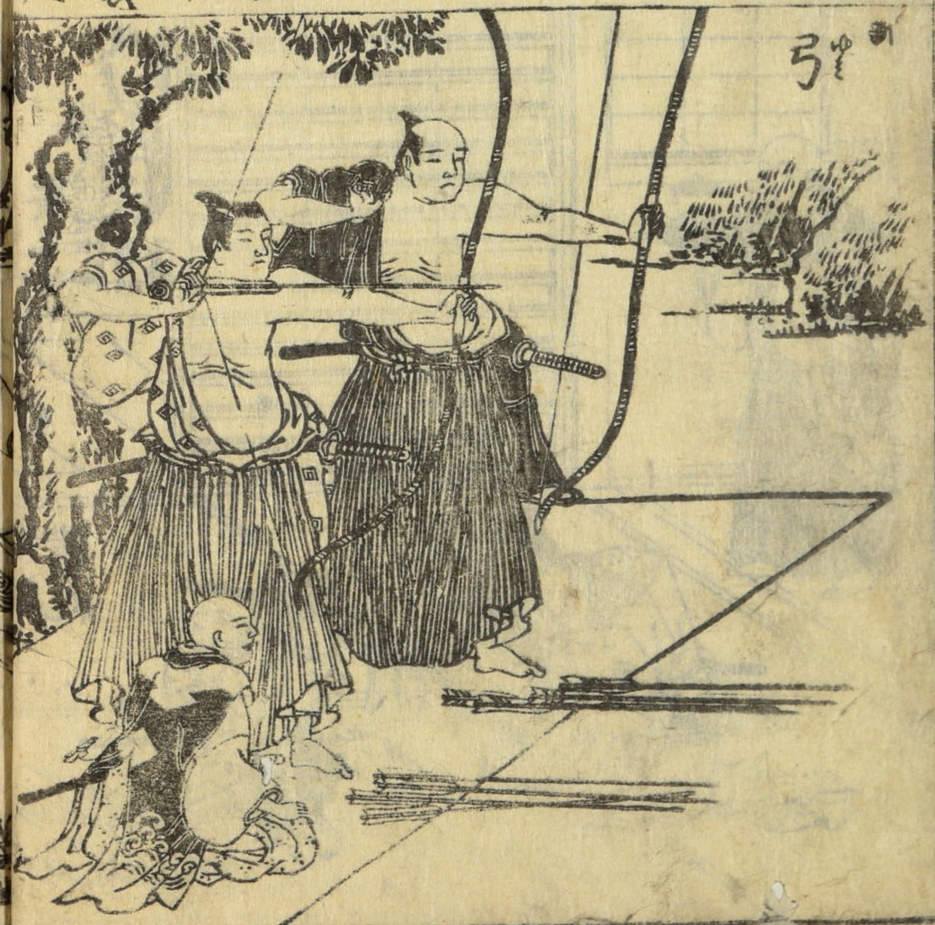
代に逆臣蚩尤といふ者謀叛を企軍に及しの女媧ふい女帝なら聖德のまゝ万民なびき従ひ終に蚩尤を討亡しめ其頭を孫くう諸人蚩尤を惡そ頭を蹴くう韓の時くうや韓のうるとい松根柳様の下を猶ものり鹿馬井家雍波家韓の代家なり上が張弘家松下一流あり

○目利は墨跡古画又万の器に真贋とく見分る人をいふ古筆ともいふ付鍬の目利は木の根を見て其家わり

○算術は方法ゆゑ貴賤とふなくて天地人の事わり天地五運乃初ゆゑも算数と伝く考ふる山万里の数と知る事も皆算勘の術とりくを人間日用算勘のる減わげく

にちいく礼なくてかなしざる事なると雲人の教ゆゑ六藝といふは礼樂射御書数の中にも礼を重じゆゑこの國は礼儀の作法は時軍義法ゆゑの古代より始きりとも小笠原家の諸礼といふ振方ともいふ仕官の人は勿論の事貴人ふまゝ人はいろ〳〵のかゝ藝なまべ品がをゑべき事也

○弓い射藝といふ武士の家にはなくてかなはぬ藝と学ばんべからず武士は弓馬といひ古より唐土に楊由基と申す弓の達人い百歩下りて柳の葉を射に一葉も射そんじず幸かしとぞ我朝にかわらくい頼西為朝徳壹守教綱北條與市等弓の達人かず其外数多精兵の射て



○馬い戦場の法かた是武士の要乃ものとて師傳伝授をうけ乃ちと肝要かり功を立切着ふるをて後るを先わ〜く曲ものり手糸面曲わりとうや弱の一ひと曲の亜〜やう法式わ〜くひ〜〜ろと八業流わり今世大坪の一流とるにもちひて武士の要乃ものとるふの演唱たやすくより大切の伝法も也ん後るの陸や

○剣術いたるかたの
ばかりなること無法なれども
いへ武士才一の為
海儀のきこゝろあり
乃流柳生流神道
流一刀流などゝ
云ふ侯家の養
教身の先とす
ばるゝ人体をしゝ
体きき事にあらざる
今稽古乃術代
おのゝく商家職人
農人等いたるまで

ゆふと云ふ法大臣入
庵の時始まるゆふ三百
六十日の年月日数之九
日星の九曜の星石乃
黒白の昼夜を表す
なりとぞ
○碁の秦の周の武帝臣
下王麿に命ずゝ作
ちゝ軍法の法とゝ
ゝ碁のなり大碁碁中
碁秦あり今りてのを
ゝ小碁碁といふを
ゝりゝひゝゝ

○茶湯いひしるしとて
ある年なをども茶
事紙数書屋と席
華本の抽ゝ科理茶
いろまで法式をたく
ゝしくかりまゝ千
利休まうてゝ法を
古田織部小堀遠州な
ど茶道の達人其流
派しあり人倫ハ茶を
行儀とするの一助なり
元来茶道ハ著とた
ゝ記数巻分もくを

○紅梅堂の別尚池坊立花の宗
匠ハ毎年七月七日
に門弟を集して立
る事ハ是ハ元祖
又抛入の傳ハ江戸
あり今世なげ入ハ
おこなハ古く花の含
知し宜なるのみ花
い人の心ハ多くハ先
繁盛とさんぞろりの
なをいまたうさみく
生徒のもてあそ
ぶまこゝろぞ

立花

○山伏と修験道とも
いふ真言の法ゆり行と
雖し身をこゝろ入る
山大山のゆりて行人
あるとあり考ふ天文易
学ゆきわひて法人乃
五運八卦と占ひまれ命
吉凶病の軽重失物乃
方ゆく先行ふまと
一流役行者の法式俗
をるものあり是行法
の先達しのふの病を
祈祷を施難治あり也と

山伏

○鷹匠唐土五帝の時
よりと貴ぜるとゝ我
朝よりくらゐ神功
皇后の御代小百濱
関より始く鷹狩を
る其後仁徳天皇乃
御代より唐より鷹狩
献ぜ〜ゝ御猟と偽さ
を備ふ狩とゝあた
きゝ光寄狩のとゝ
りゆゆゝ寄るゝ勇勢さ
かんにして武徳乃為
なるゝ武門ゝ賞とゝ
ゆく幸宜あり

鷹匠

○能いとしてうるわ
事ありしども其後小松殿乃
神子に祝世世の舞を
つゝ著公方家の能を
更ふくちろんに歌の後
江今表保生金剛とうた
て四海とのうつ猿楽
とつゝ事い猿田彦の舞
海のつひとりとや舞い
日本能興の源一ゐて
神祇釈教恋無常故
事世の流すく衆集

○笛小鼓大鼓を鼓
是とに拍子とつゝ
笛、後武者の時紅仲俱
とうや鼓い秦の穢王の
俱ゆう大鼓い湯みく
吊ゆう小鼓い法にて
様ゆうあ色張湯和
合の笑ゆう又を鼓い
芙者の時夔と然
其皮をとろて作もう
とうや或い云芙者
云とくつゝ玄女者
のゝうえに蘇牛の鼓
と作まりとき

○狂言はもとのことばにて
はなしばらくかゝるのゝ
ものまねをなすこと
狂言とは矢とるゝ人を
あざけるあるべし能と
はじく流義のうちに
わりくばしのうたうを
又ねりものゝうちに俳諧
とをるものゝうちを
狂言のなまえ狂歌と
なるもて人のあざけ
りをつゝしひとをそそる
を要とするなり

○浄瑠璃は小説出通
小姫るお通い伝長谷の
侍女うるし義経矢作
浄瑠璃姫女が文と作る
出ハ拍子捨ると作く
是を浄瑠璃といふ
其ほか浄瑠璃と沢角の両
拍子三線に合せて曲
節とかくる文芸の技
う浄瑠璃古来の史記
といちぐく変たり
京大坂江戸に浄瑠璃
古来のうたうてあるの
流義出来せり

○三絃いえ来琉球國の樂器なるよし三味線とも書あり近世諸國とりふ此三絃とりとあとぶ事なり尤婦女もわるれども朝夕にもわく自肉あり或あり故あり名月花の樂ことの余乃花奥いづと三絃とりて一曲ある要ことみ小弓をいふりのい三絃をゆり出せかゝのるべし

河原の芝にこさゝんどを敷わとしてねもとかしなるものおて今の歌下しなしし新のわかりしが次第にる上ふなりく衣服芝居中そも花美と華しそ並彼女敵歌彼なくそとくに彼とうけそ三ケの津れい常芝居とゆうりと諸人の歌とかなりのねとく芝居とこびをゆりい

○人形芝居はあやつり
とものゝ人をあやつりてあた
人形糸にてくるくるとも
つりひゝ事あり。
加者出して今の月雨よ
りてゝきて加を事出
わるかでゝ雅波行か
豊作の人芝居とゝ
とゝあやつりあり又
雅波の作田ゝ
又人形の芝居あり
ちき細工とかゝて人の
即成かゝりとかゝの上

仮わり事あり。
ど張小屋き西瓜
どもの合ゝ絵のこと
けく上ゝあきこ
人の見物うれこ
とゝ人どもやもとまで
拍子ゝ紙かゝりの
きこん事人とゝ
一つつゝとこう
うと拍ゝきこと
世間ゝきこんとゝ加
雅の時ゝ仕事こん
ゝりこゝ

○沖和いえ組空也上人ゆりて京東西堂の間に住居して茶筅をけづり作業をなす十二月十三日より京町中と賣わりく正月大ごの茶筅をそこなわ例として求る事なり

○廉寄の事 鍋といふ毎年義廉殿大明神長〻の右の人〻の身の上五穀の吾恩を神祐わる仏備國へ鍋

カクレ〻今事物人
まるい伏見の名とり
助ゆ〻年乃ふ
神所方へ嘉例と
てよろこめで寄る紀事
と者しむ又田舎さて
年馬と鉤不い秋入の
祝分きゝゆ〻くるにと
て家ちひとゝ其故い
猿いふ乃又と孫ゝ
山の子とゝ人沙人ゆと
わゝの人物ゝと書に
見へゝう

○万歳楽ハ年の始よ
ろこび剣をとり持へ
て舞ひまふなりいにし
へより有事なるよし
聖徳太子の御時に烏
帽子狩衣を下しおかれ
し例ありて今に烏
帽子素襖を着るとも
その始ハ本ハ大和なる
の農人なりけるとや
俗に万歳といふハ中古
ハ大坂より出東国へハ
三河の国よりもいづると

夫宮室衣冠動植飛沈凡百器用以文字寫貌其状是若捜力宗。苟得至彷彿求之圖繪則一目瞭然思已過半矣。故古人之講學必也右書左圖。圖書並稱。所從来尚矣。惕齋先生所著圖彙。其意所屬。蓋亦在乎此。其書奚翅訓導童蒙云爾。雖宿儒老學。亦有資以廣致格之識。家珍人藏。良有

以乾隆寬文逮今殆百幾十年。版已
就刓缺。今茲寬政己酉。顧田氏主人。
囑下河邊氏移寫舊樣。再刻剞劂。而
精工縝密。視舊有倍爲。刻成。請余以
一語。余謂。近有春朝齋山城名所圖
會。以圖繪之故。盛行乎世。朝摺暮
印。洛陽紙貴。彼實不過一卧遊之具
耳。此則觀知新。況之大有益之
而超乘過此。如指諸掌。余預爲額田
翁。化賀翁。記而驗之。

己酉四月　　春莊端隆

嘉蘭山房　中氏

寛政元年己酉三月吉辰　出来

皇都書林　九皐堂　壽梓

訓蒙圖彙 大本　全八冊

同本小本　全四冊

同增補頭書　全八冊

同增補頭書大成　全十冊

寛政元年出来 河邊拾水子画図

同增補頭書大成拾遺　全五冊 嗣出

村上勘兵衛
雲寺文治郎
今井七良兵衛
嶺田正三郎
勝村治右衛門
泉屋吉兵衛

小川太兵衛
小川弥兵衛

頭書增補訓蒙圖彙跡

二十四字文 訓蒙圖彙系目録 嗣出

富小路通三條上ル町

皇都書林　弘簡堂

須磨勘兵衛

此本持古〳〵[illegible]
安政二乙卯年三月吉
增井[illegible]